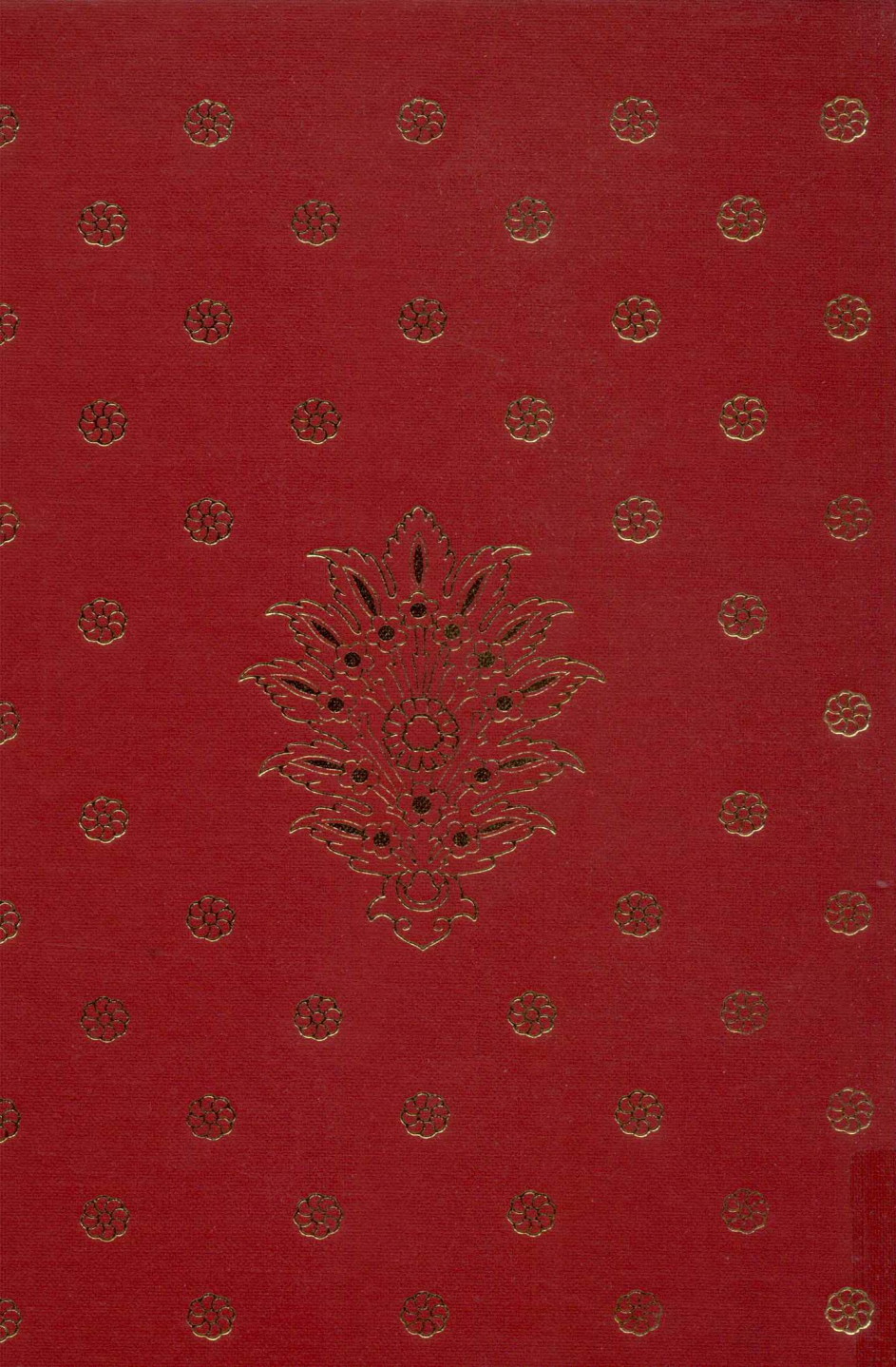
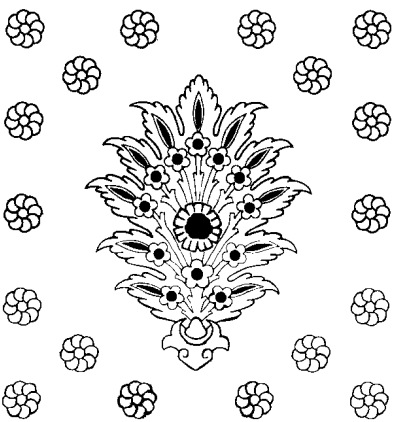


日本文学全集 29

菊池 寛
広津和郎



集英社

日本文学全集
全88巻

29 菊池寛 広津和郎集

昭和四十九年八月一日 印刷
昭和四十九年八月八日 発行

著者 菊池寛 広津和郎

発行者 陶山巌

発行所 株式会社 集英社
〒101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ10
電話 東京(265)六二二

印刷 大日本印刷株式会社
本文用紙 日本パルプ工業株式会社

著者との了解により検印廃止いたします。
落丁本、乱丁本はお取りかえいたします。

©1974 Printed in Japan

0395—157029—3041

編集委員

伊藤　整
井上　靖
中野好夫
丹羽文雄
平野　謙

装幀　後藤市三

挿絵　佐多芳郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

菊池　寛集

身投げ救助業　九
恩を返す話　一五
ある敵打の話　二五
大島が出来る話　三四
無名作家の日記　四五
忠直卿行状記　六七
恩讐の彼方に　九三
出世　一八
蘭学事始　一二七

入れ札　一四四
仇討三態　一五五
肉親　一七三
屋上の狂人　一八五
父帰る　一九二

広津和郎集

神経病時代　二〇三
やもり　二五七
線路　二八〇
巷の歴史　二八五
ひさとその女友達　三一一

あの時代　三五一
注解　四〇三
作家と作品　浅見　淵　四二〇
年譜　四五一

菊池　寛集

人生戀すれば憂
悲多しと戀せざるも亦憂悲
多きを

菊池寛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

身投げ救助業

物の本によると京都にも昔から、自殺者はかなり多かった。

都はいつの時代でも田舎よりも生存競争が烈しい。生活に堪えきれぬ不幸が襲ってくると、思いきって死ぬ者が多かった。洛中洛外に烈しい饑饉などがあって、親兄弟に離れ、可愛い妻子を失うた者は世をはかなんで自殺をした。除目に洩れた腹立まぎれや、義理に迫っての死や、恋の叶わぬ絶望からの死、数えてみれば際限がない。まして徳川時代には相対死などいうて、一時に二人ずつ死ぬことさえあった。

自殺をするに最も簡便な方法はまず身を投げることであるらしい。これは統計学者の自殺者表などを見ないでも、少し自殺ということをまじめに考えた者には気のつくことである。ところが京都にはよい身投げ場所がなかった。むろん鴨川では死ねない、深い所でも三尺くらいしかない。だからおしゅん伝兵衛は鳥辺山で死んでいる。たいていは縊れて死ぬ。汽車に轢かれるなどということもむろんなかった。

しかしどうしても身を投げたい者は、清水の舞台から身を投げた。『清水の舞台から飛んだ気で』という文句があるのだから、この事実に誤りはない。しかし下の谷間の岩に当って砕けている死体を見たりまたその噂を聞くと、模倣好きな人間も二の足を踏む。どうしても水死をしたいものは、お半長右衛門のように桂川まで辿って行くか、逢坂山を越え琵琶湖へ出るか、嵯峨の広沢の池へ行くよりほかにしかたがなかった。しかし死ぬ前のしばらくを、十分に享楽しようという心中者などには、この長い道程もあまり苦にはならなかっただろうが、一時も早く世の中を逃れたい人たちには二里も三里も、歩く余裕はなかった。それでたいていは首を縊った。聖護院の森だとか、糾の森などには椎の実を拾う子供が、宙にぶらさがっている屍体を見て、驚くことが多かった。

それでも京の人間はたくさん自殺をしてきた。すべての自由を奪われたものにも、自殺の自由だけは残されている。牢屋にいる人間でも自殺だけはできる。両手両足を縛られていても極度の克己をもって息をしないことによって、自殺だけはできる。

ともかく、京都によき身投げ場所のなかったことは事実である。しかし京都の人々はこの不便を忍んで自殺をしてきたのである。適当な身投げ場所のないために、自殺者の比例が江戸や大阪などに比べて小であったとは思われない。

明治になって、槇村京都府知事が疏水工事を起して、琵琶湖の水を京に引いてきた。この工事は京都の市民によき水運を具え、よき水道を具えるとともに、またよき身投げ場所を与えることであった。

疏水は幅十間くらいではあるが、自殺の場所としてはかなりよい所である。どんな人間でも、深い海の底などでフワフワして、魚などにつつかれている自分の死体のことを考えてみると、あまりいい心持はしない。たとえ死んでも、適当な時間に見つけだされて、葬をしてもらいたい心がある。それには疏水は絶好な場所である。蹴上から二条を通って鴨川の縁を伝い、伏見へ流れ落ちるのであるが、どこでも一丈くらい深さがあり、水が綺麗である。それに両岸に柳が植えられて、夜は蒼いガスの光が烟っている。先斗町あたりの絃歌の声が鴨川を渡って聞えてくる。後には東山が静に横わっている。雨の降った晩などは両岸の青や紅の灯が水に映る。自殺者の心にこの美しい夜の掘割の景色が一種の Romanceを惹き起して、死ぬのがあまり恐ろしいと思われぬようになり、フラフラと飛びこんでしまうことが多かった。

しかし、身体の重さを自分で引き受けて水面に飛び降りる刹那には、どんなに覚悟をした自殺者でも悲鳴を挙げる。これは本能的に生を慕いて死を怖れるうめきである。しかしもうどうすることもできない。水烟を立てて沈んでから皆一度は浮き上る、その時には助かろうとする本能の心よりほか何もない。手当り次第に水を掴む、水を打つ、あえぐ、うめく、もがく。そのうちに弱って意識を失うて死んで行くが、もしこの時救助者が縄でも投げこむとたいていはそれを掴む。これを掴む時には投身する前の覚悟も助けられた後の後悔も心には浮ばない。ただ生きようとする強き本能があるだけである。自殺者が救助を求めたり、縄を掴んだりする矛盾を笑うてはいけない。

ともかく、京都はいい身投げ場所ができてから、自殺するものはたいてい疏水に身を投げた。

疏水の一年の変死の数は、多い時には百名を超したことさえある。疏水の流域の中で、最もよき死場所は、武徳殿のつい近くにある淋しい木造の橋である。インクラインのそばを走り下った水勢は、なお余勢を保って岡崎公園を廻って流れる。そして公園と分れようとする所

に、この橋がある。右手には平安神宮の森に淋しくガスが輝いている。左手には淋しい戸を閉めた家が並んでいる。したがって人通りがあまりない。それでこの橋の欄干から飛びこむ投身者が多い。岸から飛びこむよりも橋からの方が投身者の心に潜在している芝居気を、満足せしむるものとみえる。

ところが、この橋から四五間くらいの下流に、疏水に沿うて一軒の小屋がある。そして橋から誰かが身を投げると、かならずこの家から極まって背の低い老婆が飛びだしてくる。橋からの投身が、十二時より前の場合はたいてい変りがない。老婆はかならず長い竿を持っている、そしてその竿をうめき声を目当に突きだすのである。多くは手答えがある。もしない場合には水音とうめき声を追いかけながら、幾度も幾度も突きだすのである。それでもついに手答えなしに流れ下ってしまうこともあるが、たいていは竿に手答えがある。それを手繰り寄せるところには、三町ばかりの交番へ使いに行くくらいの厚意のある男が、きっと弥次馬の中に交っている。冬であれば火をたくが夏は割合に手軽で、水を吐かせて身体を拭いてやると、たいていは元気を恢復し警察へ行く場合が多い。巡査が二言三言不心得を悟すと、口籠りながら、詫言を言うのを常とした。

こうして人命を助けた場合には、一月くらい経って政府から褒状に添えて一円五十銭くらいの賞金が下った。老婆はこれを受け取ると、まず神棚に供えて手を二、三度たたいた後郵便局へ預けに行く。

老婆は第四回内国博覧会が岡崎公園に開かれた時今の場所に小さい茶店を開いた。駄菓子やみかんを売るささやかな店であったが、相当に実入もあったので、博覧会の建物がだんだん取り払われた後もそのままで商売を続けた。これが第四回博覧会の唯一の記念物だと言えば言える。老婆は死んだ夫の残した娘と、二人で暮してきた。小金がたまるにしたがって、小屋が今のような小綺麗な住居に進んでいる。

最初に橋から投身者があった時、老婆はどうすることもできなかった。大声を挙げて呼んでも、めったに来る人がなかった。運よく人の来る時には、投身者は疏水のかなり烈しい水に捲きこまれて、行衛不明になっていた。こんな場合には老婆は暗い水面を見つめながら、微かに念仏を唱えた。しかし、こうして老婆の見聞きする自殺者は、一人や二人ではなかった。二月に一度、多い時には一月に二度も老婆は自殺者の悲鳴を聞いた。それが地獄にいる亡者のうめきのようで、気の弱い老婆にはどうしても堪えられなかった。とうとう老婆は自分で助

けてみる気になった。よほどの勇気と工夫とで、老婆が物干の竿を使って助けたのは、二十三になる男であった。主家の金を五十円ばかり費いこんだ申訳なさに死のうとした、小心者であった。巡査に不心得を悟されると、この男は改心をして働くと言った。それから一月ばかり経って、彼女は府庁から呼びだされて、褒美の金を貰ったのである。その時の一円五十銭は老婆には大金であった。彼女はよくよく考えた末、そのころやや盛んになりかけた郵便貯金に預け入れた。

それから後というものは、老婆は懸命に人を救った。そして救い方がだんだんうまくなった。水音と悲鳴とを聞くと老婆はきゅうに身を起して裏へかけだした。そこに立てかけてある竿を取り上げて、漁夫が鉾で鯉でも突くような構で、水面を睨んで立って腕いている自殺者の前に竿を巧みにさしだした。竿が目の前に来た時に取りつかない投身者は一人もないといってよかった。それを老婆は懸命に引き上げた。通りがかりの男が手伝ったりする時には、老婆は不興であった。自分の特権を侵害されたような心持がしたからである。老婆はこのようにして、四十三の年から五十八の今までに、五十いくつかの人命を救うている。だから褒賞の場合の手続などもすこぶる簡単になって、一週で金が下るようになった。府庁の役人は「お婆さんまたやったなあ」と笑いながら、金を渡した。老婆も初めのように感激もしないで、茶店の客から大福の代を、貰うように「おおきに」と言いながら受け取った。世間の景気がよくて二月も、三月も、投身者のない時には、老婆は何だか物足らなかった。娘に浴衣地をせびられた時などにも、老婆は今度一円五十銭貰うたらと言うていた。その時は六月の末で例年ならば投身者の多い季であるのに、どうしたのか飛びこむ人がなかった。老婆は毎晩娘と枕を並べながら聴耳を立てていた。それで十二時ごろになって、いよいよだめだと思うと「今夜もあかん」と言うて目を閉じることなどもあった。

老婆は投身者を助けることを非常にいいことだと思っている。だから、よく店の客などと話している時にも「私でもこれで、人さんの命をよっぽど助けているさかえ、極楽へ行かれますわ」と言うていた。むろんそのことを誰も打ち消しはしなかった。

しかし老婆が不満に思うことが、ただ一つあった。それは助けてやった人たちがあまり老婆に礼を言わないことである。巡査の前では頭を下げているが、老婆にあらためて礼を言うものはほとんどなかった。まして後日あらためて礼を言いに来る者などは一人もない。「せっか

く命を助けてやったのに薄情な人だなあ」と老婆は腹のうちで思っていた。ある夜、老婆は十八になる娘を救うたことがある。娘は正気がついて自分が救われたことを知ると身も世もないように、泣きしきった。やっと巡査にすかされて警察へ同行しようとして橋を渡ろうとした時、娘は巡査の隙を見てふたたび水中に身を躍らせた。しかし娘は不思議にもまた、老婆のさしだす竿に取りすがって救われた。

老婆は再度巡査に、連れられて行く娘の後姿を、見ながら、「何遍飛びこんでもやっぱり助かりたいものやなあ」と言うた。

老婆は六十に近くなっても、水音と悲鳴とを聞くとかならず竿をさしだした。そしてまたその竿に取りすがることを拒んだ自殺者は一人もなかった。助かりたいから取りつくのだと老婆は思っていた。助かりたいものを助けるのだから、これほどいいことはないと老婆は思っていた。

今年の春になって、老婆の十数年来の平静な生活を、一つの危機が襲った。それは二十一になる娘の身の上からである。娘はやや下品な顔立ではあったが、色白で愛嬌があった。

老婆は遠縁の親類の二男が、徴兵から帰ったら、養子に貰って貯金の三百幾円を資本として店を大きくするはずであった。これが老婆の望みであり楽しみであった。

ところが、娘は母の望みをみごとに裏切ってしまった。彼女は熊野通り二条下るにある熊野座という小さい劇場に、今年の二月から打ち続けている嵐扇太郎という旅役者とありふれた関係に陥ちていた。扇太郎は巧みに娘を唆かし、母の貯金の通帳を持ちださせて、郵便局から金を引きだし、娘を連れたままいずこともなく逃げてしまったのである。

老婆には驚愕と絶望とのほか、何も残っていなかった。ただ店にある五円にも足りない商品と、少しの衣類としかなかった。それでも今までの茶店を続けて行けば、生きて行かれないことはなかった。しかし彼女には何の望もなかった。

二月もの間、娘の消息を待ったが徒労であった。彼女にはもう生きて行く力がなくなっていた。彼女は死を考えた。幾晩も幾晩も考えた末に、身を投げようと決心した。そして堪えがたい絶望の思を逃れ、一には娘へのみせしめにしようと思った。身投の場所は住み馴れた家の近くの橋を選んだ。あそこから投身すれば、もう誰も邪魔する人はなかろうと、老婆は考えたのである。

老婆はある晩、例の橋の上に立った。自分が救った自

殺者の顔がそれからそれと頭に浮んでしかもすべてが一種妙な、皮肉な笑を湛えているように思われた。しかし多くの自殺者を見ていたおかげには、自殺をすることが家常茶飯のように思われて、たいした恐怖をも感じなかった。老婆はフラフラとしたまま欄杆から、ずり落ちるように身を投げた。

彼女がふと、正気づいた時には、彼女の周囲には巡査と弥次馬とが立っている。これはいつも彼女が作る集団と同じであるが、ただ彼女の取る位置が変っているだけである。野次馬の中には巡査のそばにいつもの老婆がいないのを不思議に思うものさえあった。

老婆は恥しいような憤ろしいような、名状しがたき不愉快さをもって周囲を見た。ところが巡査のそばのいつも自分が立つべき位置に、色の黒い四十男がいた。老婆は、その男が自分を助けたのだと気のついた時、彼女は掴みつきたいほど、その男を恨んだ。いい心持に寝入ろうとするのを、叩き起されたようなむしゃくしゃした、烈しい怒が、老婆の胸のうちに充ちていた。

男はそんなことを少しも気づかないように「もう一足遅かったら、死なしてしまうところでした」と巡査に話している。それは老婆が幾度も、巡査に言うた覚えのある言葉であった。その内には人の命を救った自慢が、ありありと溢れていた。

老婆は老いた肌が見物にあらわに、見えていたのに気がつくと、あわてて前をかき合わせたが、胸のうちは怒と恥とで燃えているようであった。見知り越しの巡査は「助ける側のお前が自分でやったら困るなあ」と言うた。老婆はそれを聞き流して逃げるように自分の家へ駈けこんだ。巡査は後から入ってきて、老婆の不心得を悟したが、それはもう幾十遍も聞き飽きた言葉であった。その時ふと気がつくと、あけたままの表戸から例の四十男を初め、多くの野次馬が物めずらしくのぞいていた。老婆は狂気のように駈けよって烈しい勢で戸を閉めた。

老婆はそれ以来淋しく、力なく暮している。彼女には自殺する力さえなくなってしまった。娘は帰りそうにもない。泥のように重苦しい日が続いて行く。

老婆の家の背戸には、まだあの長い物干竿が立てかけてある。しかしあの橋から飛びこむ自殺者が助かった噂はもう聞かなくなった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com